©日本カムリ学会 2007
Cylchlythyr 11:15-21

[Memorabilia]

—Pethau Cofiadwy mewn Astudiaethau Cymreig—

Rhif 8： 水谷 宏「書き言葉」と「話し言葉」について

カムライグ語について音声学的な立場や言語学的な立場から研究しようとする場合は当然のこと、一学習者としてこの言語を習得しようとする場合にも、「文章カムライグ語」Cymraeg Llenyddol / Literary Welsh と、「日常会話カムライグ語」Cymraeg Llafar / Colloquial Welsh との区別は重要であり、この両者を混同すると、予期しない誤解が生じることになりかねない。カムライグ語に限らず、その他の言語においても、この両者の間の「境界」を求めることは困難であるが、ごく一般的に言って、「丁寧さ」の度合い（筆者自身は、「文法の拘束性の度合い」として観察することにしている）が、「よりくだけた」方向に向うと、前者「文章語」は、後者の「日常会話語」に近づき、反対に、後者は、「より丁寧」な方向に向うと、前者に近づく、という見方が、社会言語学的な立場からの現在の学問的水準であろう。自分の使用人に話しかけるイングランド人の地主を例に挙げて、カムライグ語が第一言語ではない、我々のような、所謂「学習者」dysgwyr の人たちが、「文章カムライグ語」で話しかけると、親

©日本カムリ学会 2007
Cylchlythyr 11:15-21

しみどころか、変に「気取り過ぎ」と感じられたり、反対に、あまりにもくだけすぎた「日常会話カムライグ語」を使うと、「嘲笑」の対象にされてしまう、という趣旨の発言もある（Syr John Rhŷs (1896) 'Language Conditions: Welsh and English', *Royal Commission on Land in Wales and Monmouthshire Report,* p. 81.）。また、「日常会話カムライグ語」の使用については、「日曜日カムライグ語」との呼称を使って、市井の人々の使う「ことば」と区別して、日曜日の教会での説教のときに牧師が話すカムライグ語に言及している例（Syr Ifor Williams (1945) "Cymraeg llwyfan" *Meddwn i,* t. 52.）もある。因みに、'llwyfan' とは「演壇、説教壇、教壇」のことであり、この種の変種は、牧師の説教に用いられる変種だけではなく、より一般的には、講演、講義等々に用いられる「改まった」口語の使用が含まれると解釈していい。つまり、「日曜日カムライグ語」と呼ばれる「演壇カムライグ語」というのは、「日常会話カムライグ語」に比べると、「文章語」に近い「より丁寧な」変種であるが、文字に書いて提示されるのではなく、あくまでも、「口頭」で表現されている限りでは、「文章カムライグ語」とも区別されるべき変種なのである。ただ、「丁寧さ」の度合いが極めて「高く」、従って、限りなく「文章語」に近づいている変種であると理解していいであろう。また、このような変種が特定化されるカムライグ語の事情というのは、「併合法」（1536 年）以後、カムリの国におけるカムライグ語の使用が、家庭内と教会とに制限されたという歴史的事実にも関係していると考えて差し支えないのではなかろうか。

そのような史的背景の中で、とにかく、カムライグ語の使用においては、「文章語」と「日常会話」の違いの大きさが、しばしば、いろいろな人々によって指摘されてきた。そして、学習の場においても、「文章カムライグ語で書き、日常会話カムライグ語で話すこと」が、他の言語の学習の場合以上に強調されているのである。そのもっとも早い例は、A.S.D. Smith (Caradar), n.d. (c. 1925), *Welsh Made Easy,* Parts I & II, Wrexham: Hughes and Son. である。本誌の 研究紹介 で紹介を試みようと思ったが、研究というよりは、極めてユニークな語学書であり、今回、この欄で紹介しようと思う。

小冊子であることにも拠るのかもしれないが、出版年代は (n.d.) ながら、著者による序文の終わりに、August 24, 1925 とあるので、(c. 1925) としておいた。同書のユニークさの第一は、カムライグ語に限らず、ほとんどの言語の研究や学習の手引きにおいても、ラテン語文法とその影響を強く受けていた英語文法の桎梏の下に、その対象は、「日常会話」に用いられている変種ではなく、「文章語」が中心であった時代（言語研究、言語学習の「古典語主義時代」とでも名付けていいだろうか）にあって、カラダール著「易しいカムライグ語」

©日本カムリ学会 2007
Cylchlythyr 11:15-21

は、読者に「話す」能力を涵養しようとするものである点が挙げられる。序文において著者は、

"My chief aim has been to encourage the reader to *speak* Welsh, and that at his own fireside, without the aid of a teacher: to break down that initial shyness most of us feel when trying to talk a strange language for the first time: and to set him on the road to a more comprehensive knowledge of this fine old tongue, which can only be got by reading Welsh books and talking to Welsh people."

と述べている。これこそ外国語学習の本来あるべき姿であるとともに、「文章語」と「日常会話語」との区別を明確につけて学習に取組む姿勢を薦めている点は、同書が出版された時代のみならず現代においてすらも極めてユニークな点だと指摘できよう。今のように録音教材を添付できなかった時代では、著者の並々ならぬ配慮が随所にみられるので、以下にそのいくつかを紹介する。

各課の基本的な構成は、大抵の語学書同様、まず、その課の学習項目についての文法的、語彙的説明があり、その後に、練習問題が用意されている。ユニークな点というのは、この練習問題の構成である。練習 (a) では、「文章カムライグ語」の練習文がいくつか用意され、「読解」（音読と内容の理解）の練習をするようにとの指示が与えられている。次いで、練習 (b) は、「日常会話カムライグ語」での「発音」の練習が、(a) の各文を用いて与えられている。以上の練習により、学習者は、「文章語」と「日常会話カムライグ語」での「話し方」の相違を学ぶことができる。さらに、練習 (c) では、練習 (a)で学習した「文章カムライグ語」の各文に対応する「英語文」が与えられ、その英文を見て、1) 「日常会話カムライグ語」で話し、2) 「文章カムライグ語」で書く練習をするようにとの指示が与えられている。こうした三段階の練習を、中途半端で終わることなく、完全にマスターした後、次の課に進むように心がければ、この学習書の目的である「**文章カムライグ語で書き、日常会話カムライグ語で話すこと**」が達成されるのである。この学習書は、当然、英国（主に、カムリとイングランド）に住む、英語使用者で、真剣にカムライグ語を習得しようとする読者を対象に書かれたものであるが、われわれ日本人学習者でも、日本の中学から高校程度の英語力があれば（語彙については、コンサイス程度の英和辞書の助けが、時には必要)、充分に活用できるのである。

さらにユニークな点は、「文章カムライグ語」の音読の場合や、「日常会話カムライグ語」で話す場合に必要な「発音」についての指導である。1925 年の出版であり、国際音声学協会 International Phonetic Association の国際音標文字 IPA も既に存在はしていたが、ごく限られた人々の間での使用に限られてい

©日本カムリ学会 2007
Cylchlythyr 11:15-21

た（現在でもこの事情は程度の差こそあれ存在するが、日本人読者の多くの人たちには、学校での英語学習を通じて、辞書等々で使用されている「発音記号」については、多少の知識があり、IPA での表記でも活用できると想像できる）。そのような事情から、著者独特の「発音表記」 'Imitated Pronunciation' （「模倣発音」 I.P. の略字を用いている）を考案して、英語使用者であれば、どのような「音」であるかを、かなり正確に頭に描ける方法を導入し、本課に先立ち、カムライグ語の発音について 16 ページを割いて、丁寧に解説と練習とを用意している。まず、著者の考案による次のような「発音の手引き」Phonetic Key のセクションが用意されている。

'Imitated Pronunciation' の記号	英語にある類似音	英語の例
ā	a	half
a	a	hat
ē	a	late
e	e	let
ee	ee	deep
i	i	dip
ō	o	note
o	o	not
oo	oo	fool (oo–long)
o͡o	oo	foot (oo–short)
u	u	fur
ei	ei	height
oi	oi	boil
ow	ow	now (not as "know")
th	th	think
th	th	the
g	g	get (not as "gentle")
r	rr	error (i.e. r–trilled)
s	s	sister (not as "miser")

ただ、カムライグ語にあって英語にない CH, LL, RH に関しては、別の表記を考案しないで、*イタリック体*で示して、読者の注意を喚起し、別途の発音の解説を理解して、正しいカムライグ語音を身につけるよう指示している。これらの記号は、一部、英米で出版されている英語の辞書で採用されている方法と同

©日本カムリ学会 2007
Cylchlythyr 11:15-21

じものもあり、英語使用者にはさほど困難な記号体系ではないと思われる。日本人学習者の場合には、前述のように、IPA に準拠した「発音記号」のほうが慣れ親しんでいるものと思われ、上に挙げたような記号をさらに学習するには手間がかかるかも知れない。しかし、同書を活用しての学習には欠かせない。幸い、英語の単語を例に用いた練習が豊富に用意されているので、指示に従って学習に取組めば、このような新しい方法も簡単に習得できる。一度習得してしまえば、本課を通して終わりまで活用し、カムライグ語を自由に話せるので大きな財産となることは間違いない。

さて、ここで問題となるのは、このような「発音記号」による「話されたことば」の転写である。音声学研究を目的とする場合には、「音声転写」phonetic transcription という作業があり、国際音標文字の体系を駆使して、発音の実体を明らかにするための記述がなされる。時には、かなり詳細な 「精密表記」narrow transcription も行われる場合もある。しかし、外国語としてのカムライグ語の学習には、それほどの「精密さ」は必要ではない。目的は、あくまでも学習のための「視覚補助手段」としての「転写」である。そのような場合、現実に「口頭」で発音して話される「発話」utterance なり「文」sentence は、音声であり、これを「話し言葉」spoken mode と呼ばれる。これに対して、「話し言葉」の音声を、「精密転写」ほど詳しくはないが、学習者に「音声実体」を「視覚補助手段」として「転写」したものを、「書き言葉」written mode として区別することが必要である。この区別に関しては、David Abercrombie (1967) *Elements of General Phonetics,* Edinburgh: Univ. Press, p. 3. では、次のように定義している。

> "The medium of language in its spoken mode is created by movements of lips, tongue, larynx, lungs, and other organs, and addressed to the ear. The medium of language in its written mode is created by movements of hands, arm and fingers, and is addressed to the eye."

そして、前者を "aural medium"、後者を "visual medium" と呼んでいる。つまり、「受け手」は、"aural medium" で発信されたものは、「耳」で聞いて「受信」するしか方法はなく、"visual medium" で発信されたものは、「目」で見て「受信」するしか方法はない。

このように考えてくると、「文章カムライグ語」と「日常会話カムライグ語」という「変種」の区別とは別に、「話し言葉」とそれを書き写した「書き言葉」の区別も必要になってくる。カラダールが、英語の使用者を対象としたその著「易しいカムライグ語」 ***Welsh Made Easy*** の各課において、練習 (a) に印刷されているのは「文章カムライグ語」の例文であり、練習 (b) に印刷されてい

©日本カムリ学会 2007
Cylchlythyr 11:15-21

るのは「日常会話カムライグ語」の「視覚補助手段」として「転写」された「書き言葉」ということになる。従って、実際に話される「日常会話カムライグ語」Cymraeg Llafar / Colloquial Welsh を「耳」で聞きたければ、しっかりと学習して、自分自身の「唇、舌、喉頭、肺、その他の発音器官を駆使して」大きな声で現実に「話す」のが一番である。そのための「視覚補助手段」に「発音表記」を活用すればいいのである。

まとめとして、われわれ外国人学習者の実際的な対応について述べることにする。「文章カムライグ語」については、過去の紆余曲折を経て、カムリ大学の The Language and Literature Committee of the Board of Celtic Studies が、1928年に集約した *Orgraff yr Iaith Gymraeg* 「カムライグ語正書法」に準拠した、所謂「伝統的文章カムライグ語綴字法」が、かなり「標準化」されたものとしてほぼ定着しており、文法書や「文章語」の教科書などに採用されているとともに、諸種の公式の報告書等々でも用いられているので、それを参照するのが妥当であろう。文献等を読む場合には、この「綴字法」に慣れる必要がある。一方、「日常会話カムライグ語」の「書き言葉」には、会話書によっては多少のばらつきも散見されるようである。保守的な傾向の強いものでは、上記のかなり標準化された「文章語」の綴りに準拠したものもある一方で、「口語」を表面に打ち出して、「話し言葉」の学習を勧めるタイプの教科書では、その「話し言葉」をかなり忠実に「転写」しようと試みた「書き言葉」による「表記」が見られる。前述のカラダールの「発音表記」は別として、例えば、「文章語」では、動詞活用語尾の一人称単数「過去形」には、*-ais* が用いられ、名詞の複数語尾は *–au* が用いられているのに対して、「話し言葉」では、それぞれ、[-ɛs], [-ɛ] （南部方言形）が用いられるところから、*-es, -e* の綴り方が採用されているものもある。(Cf. *Darllennais eich llythyr.* 「私はあなたの手紙を読みました」（文章語）: *Fe ddarllenes i'r llyfr ddoe.* 「私は、昨日、その本を読みました」（口語形）T.J. Rhys Jones (1977) ***Living Welsh,*** Sevenoaks: Hodder and Stoughton, p. 167.) 論文の要約などの場合には、当然、「文章語」を用いるべきであるが、手紙などの場合でも、よほど親しい友人の場合以外には、「文章語」を用いる方が無難であろう。ただ、相手が「口語形」を多用して返事をくれるような場合には、それに合わせて「口語形」を用いる方が適切であろう。外国人だからと、無理に「文章語」で返事を書くと、友人としての「親しみ」が失われる可能性がある。

いずれにせよ、「文章語」と「日常会話」とをはっきりと区別して、正確に学習した上で、カムライグ語を使用するのが望ましいのは言うまでもない。それには、その過程では何度もしくじったとしても、とにかく、「文章語」であれ「口

©日本カムリ学会 2007
Cylchlythyr 11:15-21

語」であれ、何度でも使って身につける以外に方法はないであろう。